竹千代賞

八月六日

栗原微始

十三年前の八月六日。家族の笑顔が待つ幸せの中で生まれた日。以来、毎年「○歳のお誕生日おめでとう。生まれてきてくれてありがとう」の言葉とプレゼントをもらう、私のハッピーな日。

しかし、物心がつくようになると、世の中ではハッピーな日ではないらしいと気づいた。

○回目の「原爆の日」を迎えたという新聞やテレビの報道。蝉しぐれをＢＧＭに広島の平和記念公園での式典。夜、原爆ドーム近くの川に揺らめく灯ろうの淡い光。

学校の社会科の授業で学び、詳しいことがわかってきた。国語の教科書にも、毎年必ず戦争を扱った物語文がある。『ちいちゃんのかげおくり』が印象深い。今年は米倉斉加年の『おとなになれなかった弟たちに…』を勉強している。

私の祖母は、戦争を体験しているので、小学三年のとき、戦争について無邪気に尋ねてみた。そう、無邪気に。

記憶をたどりながら、食べ物がなくてひもじかったことなどを断片的に話してくれた。ところが、焼夷弾の

話になったとたん、大粒の涙を流し、声をつまらせた。それは、恐怖と憎悪と悲嘆なのだ、と理解した私も、怖くなって泣いてしまった。

それ以降、祖母に戦争のことを尋ねるのはためらわれた。

こんな思いを小さいときに味わい、それを心に秘めて祖母は生きてきたのだ。私は尊敬の念すら抱いた。そして、祖母のためにも今の平和が永遠に続くことを願った。

平和を希求するなら、七十五年前の八月六日のできごとに無関心でいてはいけない。知ろうとしなければ、なぜそうなったのかを。

そんな折、本屋さんで、私の目に飛び込んできた本のタイトル『平和のバトン』。サブタイトルには私の誕生日「八月六日」が含まれている。―広島の高校生たちが描いた8月6日の記憶―

高校生が、この日に起きた一つ一つを被爆者から直接聞きとり、それを元にして油絵という具象物を創り上げることで記録に残すプロジェクト。「次世代と描く原爆」。

高校生にとって、未体験の場面を絵にする作業は、想像力や知識が必要だ。やり遂げる過程で、世代を越えた者どうしの心の交流・絆が生まれていく。人としても成長していく。

二度と思い出したくない記憶、できれば葬り去りたい記憶を掘り起こす。それは高校生には荷が重い。なぜなら、私の祖母が涙する姿を目にしただけで心しめつけられたのだから。祖母が精神を保つための手段は、現実を現実と認めないこと、記憶から抹殺することなのだ。

それをあえて思い起こし語ってくれた広島の被爆者。口を開き始めた人々の思いの一つには、七十五年が経ち、記憶がますます薄れ、完全に平和ボケしてしまった世の中に対する危惧がある。

知らぬ間に戦争に突き進んでいった当時のきな臭さを、今の日本や世界の動向に、被爆者は感じとっているのだ。だからこそ、残された人生を語り部として生きるのだという覚悟と使命感をもったのだ。

この高校生たちにはわかっていた。自分たちの今の幸せは、悲惨な体験をした大勢の人々の苦しみの上に築

かれている。歴史は続いているのだ。だからこそ、踏み台にして踏みにじってはならない。絵画として記録することによって、同じ傷を背負い、被爆者の傷を軽くし、心を解放していくことができる、と。

語り部となった被爆者の思いに、私たちは応えなければならない。七十五年も前の、年表に載るほど昔のできごと、自分には無関係などと呑気にしてはいられない。

知らなければ。知ることが平和への小さな一歩になる。過去のできごとの原因と結果を学ぶことで、愚かな繰り返しを回避できるはずだ。

世界は、自国ファーストを声高に、臆面もなく叫び合っている。手をこまねいていては平和は維持できない。声をあげなければ。そして、もっともっと学ばなければ。

毎年巡ってくる八月六日。私にとって二つの意味をもつこの日が、平和な三六五日の中の一日であり続けてほしい。だから、私は、多くのことを、読み、聞き、知っていきたい。さらに、知ったことを自分の思いとともに発信する機会をもっていきたい。

今年から私の誕生日は「戦争のない平和な時代に、この家族の一員になれたことを感謝する日」に変わった。同時に「地球の未来は希望の光が差していることを確認する日」となった。

希望の光が永遠に、地球に生きる人々に届くと信じて。